2023年度

（教育学部）

問題冊子

教科等	ページ数
小論文	6

試験開始の合図があるまで，問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は，問題冊子の指示に従って，別紙の解答用紙の所定の欄に横書きすること。
2. 解答用紙のます目に一文字ずつはっきりと解答を書くこと。
3. 行末以外は句読点に一文字分をあてること。
4. 解答用紙の所定の欄に，受験番号を記入すること。
5. 解答用紙には，指示された事項以外はいっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後，解答用紙に受験番号を必ず書くこと。
2. 下書き用紙は，片面だけ使用すること。
3. 問題の内容についての質問には応じない。ただし，その他の質問等があるときは，手を高くあげ，監督者の指示を受けること。
4. 監督者の「やめ」の指示で，ただちに筆記用具を置き，解答を終了すること。
5. 試験終了後，問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

問題　次の文章を読んで，後の設問1，2に答えなさい。

世界の犬天国イギリスからは，現在ペット・ブームの日本に毎年非常な数の愛玩犬が輸出されている。ところが，日本人は扱いに困ったり，不用になったりすると，すぐ犬を捨てることが英国の大衆紙で取上げられ，犬がかわいそうだから輸出を中止せよという声が起って，これが英国の国会で問題になったことが昨年報道されたこともある。

たしかに多くの日本人はいらなくなった犬や猫をいまでも捨てる。捨犬，のら犬，野犬狩りなどということばは英語には訳せない。

それならば多数のイギリス人はこのような時どうするかというと，薬で殺すか，ピストルで撃ち殺すのだ。イギリス人はこの方法が最小の苦痛で殺せるから一番合理的で動物のためになる処理法だと考えるのである。

ところが私たち日本人にとっては，可愛い仔(こ)犬を自らの手で撃ち殺すことなど，かわいそうでできたものではないし，薬殺も嫌だと思う。ふだんろくに世話もしない，かまいもしないのら犬でも，保健所の職員が捕えに来ると，妨害したり逃がしてやったりするくらいだ。

もちろん現在のような過密社会では，野犬を放置したり，犬を捨てたりすれば，いろいろな不都合が生じることは経験ずみである。捨犬は決してほめられたことではない。私たちもイギリスの人のような考え方を犬に対して持つ方が現代の都市生活では具合がよいことは明らかだ。

しかし私がここで考えてみたいことは，具体的な方策の良し悪し，つまり現代社会では犬をどう飼うのが一番望ましいかという点ではなく，不用になった飼犬を自分の手で始末することをよしとする考え方と，むしろ自分の眼のとどかない所に持って行って捨てて来る日本人の心理の相違を問題にしたいのだ。

本論の究極の目的は残酷という概念の比較文化的考証にあるのではなく，私たち日本人が自分たちをめぐる基本的な問題を考える場合，いつの間にか元来は日本人にとって異質的であり，外来的でしかない西欧的価値規準を，あたかもそれが普遍的な尺度であるかのように錯覚して使用していることが，しばしばあることを一つの実例を以(もっ)て指摘することにある。日本の近代化そして西洋化という一大文化変容が，大量

の人間の移動を伴う征服や移民という文化変容の定石をふまず，ひたすら「ものと文献」という人間の直接的接触をできる限り捨象した極めて例外的な形で行われてきただけに，ことばにたより切った外来文化受容の問題は，言語学の避けて通ることができない重要な問題である。

「オランダの犬のしつけ」と題する昭和46年5月18日の『朝日新聞』朝刊の投書を次にかかげよう。

> 「アムステルダムで生活していると，犬が電車の中に乗っていたりして，日本にはない光景にあいます。犬は大切にされています。しかし実は，犬自身が大変おとなしく，しつけがいいのです。犬が人間のにおいをかぐことはめったにありません。一度だけ電車に乗っている老婦人のつまさきを犬が遠慮がちにかいだのを見たことがあります。まして人にほえるということはないです。こういう犬だからこそ，電車にも乗れるというものです。「犬」が違うのではないかと思うほどですが，実はこれは人間の方の問題なのです。大体他の人間のにおいをかぐということは，大変失礼なことです。従って人さまにそんなことをする犬を持っている人も，失礼な人であり，犬を飼う資格はありません。」

この方は犬に匂をかがれるのを非常に嫌っている人とみえるが，ともかく，故国日本の犬の無遠慮，不躾（ぶしつけ）と思い比べてショックを受けたことは明らかである。しかも，この犬の行儀よさを，どうも飼主の資格，つまり人間性の問題に帰しているらしいが，私があとで論じたい点はまさにこれなのである。

或（あ）る文化，或る民族に固有な動物観とは固定的決定的なものではなく，また内容も単一明快なものでもない。イギリス人やオランダ人などが犬を完璧に近いほど躾けられる原因の一つには，古くからかなりの牧畜文化を所有していたため，家畜の扱いに馴（な）れていることも数えることができよう。また気候風土の関係で，犬と人間が閉鎖的な家屋の，一つ屋根の下に住む必要があったため，厳しく躾けなければ，人間の生活が乱されてしまうからだとも考えられる。

これに対し日本人は問題とするに足るような家畜文化も持たなかったし，家屋も開放的であり，高温多湿のため犬と同居することは，必要でもなかったし得策でもなかった。したがって人間と犬が狭い空間を共有することからくる共存のパタンを生み出しにくかったのであろう。

また宗教的な理由も一役買っているに違いない。キリスト教は周知の如(ごと)く動物には魂を認めないが，日本人の古来の宗教は，アニミズムやシャーマニズムの要素が強く，そこに加重された仏教には輪廻(りんね)の思想もある。

このような彼我の世界観の違いは一言にして言えば断絶の思想と連続の思想の対比である。前者の立場に立てば，人間の優位は決定的であり，後者の立場では相対的なものでしかない。

イギリス人にとって残酷とは，人間を中心とし原点とした立場から，それぞれの動物に彼等が割当てた役割にふさわしく，その動物を扱わない場合に生ずる概念であるらしい。日本人にとって残酷とは，無益無用の殺生につながる概念であろう。

残酷の概念に関して犬だけについて述べたのでは，余りに議論が片寄りすぎると思うので，今度は少し馬のことも考えてみよう。現在，都会でこそ姿を見かけることが少なくなったが，それでもスポーツとしての乗馬，観光地における貸馬，そして日々に人気の増大する競馬などで，馬は日本人に親しまれている動物の一種であることは間違いなかろう。

イギリス人と日本人では馬に対する態度，考え方が根本的に違うといった印象を受けたという日本人は少ないと思う。

こちらに馬車があれば向うにもある。日本で馬を農耕に使えば，あちらも同じといった具合に，対応する点が極めて多いからである。さてそこでロンドンに滞在している或る日本人が，冬の寒い日にふと馬肉料理で一杯友達と飲もうと思い立ったとしよう。日本で馬肉は，あかい色をしている所から，桜肉と呼ばれ，比較的値段が安く，食べれば温まると一般に広く信じられている。ソーセージやプレスハムに混ぜられることは勿論(もちろん)，安い牛肉の中には，大分馬肉がまぜてあることさえあるという話しである。

このようなわけだから，日本人が，ロンドンで馬肉を食べようとしたとしても，別に不思議ではない。ところが近くの肉屋に行って，「馬肉3ポンド下さい」と言ったらどうなるだろう。恐らく肉屋の主人は，不機嫌そうな怒ったような顔をして，そんなものは置いてないとか，売ることはできないなどと返事をするにちがいない。何故だろうか。

驚いたことに，イギリスでは馬肉は人間が食べるものの中に入っていないのだ。そ

して馬肉を普通の肉屋が売ってはいけないという規則までちゃんとあるのである。

現在のイギリス人は犬と並んで馬を人間の友達と考えているらしい。馬肉を食べるということは，殆(ほと)んど人間を食うことに等しい嫌悪感を起させることなのだ。

だから，日本人がもし馬肉を下さいなどと肉屋に言おうものならば，ゲテ物好きと思われるどころか，日本人とは何と残酷な人種かと思われかねない危険がある。

日本人とイギリス人では，社会生活上，その利用法や位置づけに，それほど相違があるとも思えない馬が，感情的領域においては価値づけが全く違うのである。私は英国に旅行したことのある人や，滞英経験の長い人たちに，馬肉に関するイギリス人の考え方を尋ねてみたが，誰一人としていま述べたようなことを知っていた人はいなかった。ここでも再び，「かくれた文化」に気がつくことが，いかに難しいかを思い知らされたのである。

外国のことは，外国に行ってみなければ判(わか)らないことが多いのは確かである。しかし，ただそこに行ったからとて，いやそこで長く暮したからとて，必ずしも判るものではないのが「見えない文化」なのである。見る方の人に，自分の文化を原点とした問題意識がなければ，実に多くのことが，そこにあっても，見えないのである。

純自然科学的な概念は別として，社会科学や人文科学の分野で用いられる概念の大部分は，特定の社会や文化に見られる各種の事実や現象に基づき，概念化され形式化されたものである。この意味では多分に経験的な性格を持っているものと言えよう。

私たち日本の学者そして知識人の使用するこの分野の概念は，多かれ少なかれ西欧に由来するものが多いことは否定できない事実である。従ってこのような概念は，その価値のよりどころを西欧的現実に置いているのであって，その意味では概念それ自体が，それだけで客観的に独立した存在として直ちに普遍的な価値を持っているわけではない。

それにもかかわらず，少なくとも私の見る所では，これらの西欧起源の諸概念が，いつの間にか普遍的な尺度の性格を持つものとして，私たち日本人に受けとられていることが少なくないようである。

その理由はすでに各所で繰返し力説してきたように，ことばというものの本質の理解が不充分だからであると考えざるを得ない。

ことばを氷山にたとえてみよう。氷山の水面に表われている部分は全体積の約 $\frac{1}{7}$

の由である。$\frac{6}{7}$は水面下に沈んで見えないのだ。

ことばによって概念化され得る現実の部分は，正に水面より表われている部分とみなすことができる。ところが，ある概念を自ら作り出した人々には，この表われている部分が，水面下にかくれている部分の上部構造であることは，いわば暗黙の前提なのである。この見えない部分は，明示的な部分としての概念に，固有の価値を与える基盤と考えてもよい。

水面上の見える部分がほぼ等しい形態を持つ，ＡとＢの２つの氷山があった場合に，それぞれの水面下の部分の形態が等しいとは限らないことは容易に理解されよう。

文字の問題，音韻の問題，文法の問題のどれをとっても，従来の西欧語をそのまま物差しにしたのでは具合の悪いところがいくつもある。それを言うに事欠いて，日本語は不便だ，非論理的だなどと言い立てたことがなんと多かったか。私はこのような日本人の精神構造を，「誤れる対象への自己同化現象」と呼んだことがある。

私の考えでは，日本語を，そして日本的現実をはかる尺度は，日本語それ自体，日本的現実それ自体に求められるべきだと思う。もし西欧起源の尺度と対比させ，普遍化を目ざすならば，それは両者を共に含み，共に説明できる一段高い次元に於(おい)てのみ可能であって，西欧の尺度を流用しての安易な普遍化が可能である筈(はず)はないと思っている。

出典：鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波新書，1973年５月，105～128頁より)ただし，一部省略・変更した箇所がある。

設問 1　下線部の原因について，筆者の考えを 100 字から 150 字以内で述べなさい。

設問 2　問題文は，著者が執筆した時点における，外国語を学ぶ際の日本人の価値意識をめぐる課題について論じている。現代の日本と外国の社会・文化を照らし合わせてみたとき，表面的には同じ概念を示す言葉でも，それぞれからイメージされる価値意識は大きく異なることが少なくない。私たちが外国語や外国文化を学ぶ上で，この点をどのように考えたらよいか，具体例を挙げて，700 字から 800 字以内であなたの考えを述べなさい。